

本戦史ハ戦紀(軍機)、通信史(軍機)、機關史(極秘)、衛生史(秘)、經理史(極秘)ニ分類
編纂ス。初めて公刊される満州事変・上海事変の海軍正史。

戦紀ハ之ヲ卷一乃至卷三分ツ。卷一ハ事變前期即チ事變ノ根本原
因ヨリ満洲事變ノ勃發竝ニ以後上海事變ニ至ル迄ヲ、卷二ハ事變中期

軍機 海軍軍令部編

昭和六七事變海軍戦史

全四卷
別卷一

監修・解説||田中宏巳・影山好一郎

月三日以後ノ事項ヲ記述セリ。

又國際關係事項ハ國際關係(秘)ト題シテ別冊ニ之ヲ編纂シ、其ノ參考文書

ハ國際關係參考文書(秘)トシテ別冊ニ輯メ、共ニ附録トシテ刊行セリ。

尙總目次(軍機)ハ之ヲ別冊トシテ添附ス。

綠蔭書房

昭和六・七年事変海軍戦史の由来について

大正五年三月三十一日の内令第七一号「海軍機密図書取扱規則」によって戦史の取扱いが大きく変わった。該規則第四条の規定によって、「戦時編制及戦時編制実施規則」「出師準備及防禦計画図書」「諸信号書及諸暗号書」等高い秘匿性を必要とする十点(項目)の「軍機図書」が指定された。その最後から二番目にはじめて「海戦史」が上っており、この時から戦史が軍機扱いとされるに至った。

これ以前に編纂された日清戦争の『明治二十七八年海戦史』は「秘」及び「部外秘」・「普通」の三本立て、日露戦争の『明治三十七八年海戦史』は「極秘」及び「秘」・「普通」の三本立てであったが、大正五年四月以降は「軍機」一本ということになったわけである。戦史が最高の秘匿扱いである「軍機」になぜなったのか明らかでない。日清海戦史や日露海戦史について、軍人も一般人も「普通」戦史から材料を得て学んだが、「秘」または「極秘」戦史については、海軍大学の教官や軍令部の参謀等のごく一部だけが利用を許された。しかし「軍機」戦史となると、高級将校でもその存在さえ知らされず、仮に知っていても嚴重な手続きが立ちほだかり、事実上閲覧不可能であった。太平洋戦争後、兵学校でも海大でも日露戦争ばかりを取り上げ、その後の戦争について知らなかったことが敗因の一つとする指摘が少なくない。その原因は、とくに日露戦争に強い関心があったというよりも、大正五年以降、戦史を軍機とし封印した制度に由来するものであったといえるべきだ。

大正五年以降に編纂された海戦史を時代順に列記すると、『大正三・四年海軍戦史』『大正四年乃至九年海軍戦史』『昭和六・七年事変海軍戦史』『大東亜海軍戦史』(未完成)のようになる。いずれも「軍機」扱いで『大東亜海軍戦史』を除いて昭和三十年代まで存在

本資料の特色

■ 原本は米議会図書館が唯一所蔵しているもので、今回が日本初公刊。(刊行にあたっては田中宏巳氏所蔵のマイクロフィルムを使用した)

■ 原本は保存状態が大変悪い(閲覧に堪えられない無惨な状態)ため、その内容を確認できるのは本書のみである。

■ 本戦史は「軍機」という秘匿度が最も高いものであったため、昭和天皇をのぞき高級将校でもその存在を知るものは殆んどいなく、今日まで研究者未見の史料であった。

■ 本戦史には敗戦直後の焼失によって、今日現存しない多数の貴重な文書・史料が含まれ、又上海事変をとりまく国際関係文書を多数収録している。

■ 今回の出版によって、満州事変・上海事変の厚いベールに包まれていた史実の詳細が初めて明らかになった。満州事変・上海事変の戦史研究はもとより、国際政治史、外交史、在華邦人史、抗日運動史等に欠かせない正に第一級の資料である。

■ 今回本書には、軍機を中心資料である『戦紀巻一・巻

が知られなかった。昭和三十七年、アメリカの首都ワシントンにある議会図書館アジア課日本部が管理していた接収文献類を調査していた大阪大学の梅沢昇氏は、同館所蔵の WDC (Washington Document Center) 接収文献類の中に、これらを見つけたが、日本国内にまったくないとは思わなかったらしい。

防衛研究所戦史室(当時)は同氏の作成した右資料を含む目録に基づき米政府に返還を要請し、四十一年に返還された。ところが議会図書館が返還前に大急ぎで進めようとしたマイクロ撮影が意外に長引き、これら資料の梱包が間に合わず米国内に残ったままになった。これら資料は作業をしやすくするため装幀を解体され、撮影後紐でしばったまま議会図書館に保存されてきた。したがって資料の本体は、到底閲覧には耐えられない無惨な状態にある。

こうした経緯で作成されたマイクロフィルムを元に行っている本書は、第一次上海事変における海軍の活動を記述したものである。「総目次」「戦紀」「通信史」「機関史」「衛生史」「経理史」「付録」などの部門から構成され、全部で十冊にもなる。海軍内の関係部署に対応する構成とし、「総目次」「戦紀」「通信史」は「軍機」、「機関史」「経理史」は「極秘」、他は「秘」にされたが、全巻を一セットとして所要の期間に配付したため、実際には全巻「軍機」で処理されたようである。日露戦争のような戦役史と異なり事変史は編纂の期間と経費を切りつめるため、一次資料に多くを語らせ、編者は史料間のつなぎ役に徹する方式を採用している。一次史料は、今日存在しないものが相当数あり、それだけでも資料的価値を高めている。本復刻では、「軍機」の中心である「戦紀巻一・巻二・巻三」及び「付録」国際関係・国際関係参考文書「総目次」を収録した。

本書がわが国で自由に見られるのは、今回が最初である。大正五年以降、凍結状態にあった戦争史研究が、八十五年ぶりに動き出す歴史的契機になってほしいものである。とかく戦争史には、自己弁護で終始したり、自説持論をまくしたてるものが多いが、そろそろ日露戦争の影に無縁な客観的かつ科学的的手法によって、第一次大戦以降の戦争を検証する時期にきているように思われる。

二・巻三』とその補完資料『付録』国際関係・国際関係参考文書』及び『総目次』を収録した。

資料的価値を考慮し、原則として、影印復刻とした。又、別巻に解説を付し、利用者の便をはかった。

本書の内容(目次より)

第一巻「戦紀巻一」

第一篇 帝国ト満洲トノ歴史的關係

清朝時代ノ満洲

露西亞ト満洲

日露戦争以後満洲ニ於ケル我が權益(日露

媾和条約中、満洲ニ関スル条項ノ満洲ニ

関スル条約並ニ付属協定ノ滿蒙ニ於ケル

日本ノ權益ト米國)

満洲ニ於ケル張作霖及張学良

第二篇 支那国民政府ト日支外交

支那ニ於ケル国民党ノ制覇(中国国民党ノ

成立ノ国民党ノ苦境ト連露容共ノ国民党

命軍ノ北伐ト共産党ノ分離ノ南京・漢口

事件及山東出兵ノ国民党ノ全支統一及其

ノ内部抗争)

晩近ノ日支外交(欧州大戦ト日支交渉ノ華

府會議ニ於ケル山東問題及九国条約)

第三篇 支那ノ排日運動

排日運動ノ由来

排日運動ノ経過

第四篇 満洲事変

事変前ノ日支繫争(各種繫争事項ノ朝鮮ニ

於ケル反支暴動ノ中村大尉殺害事件)

満洲事変ノ勃発(事変直前ノ状況ノ事変発

生直後ニ於ケル関東軍ノ交動)

満洲ニ於ケル関東軍ノ作戦(朝鮮軍ノ満洲

出動ノ各地ニ於ケル関東軍ノ作戦)

第五篇 海軍ノ警備状況

満洲事変ニ対シ海軍中央部ノ執リタル措置

第二遣外艦隊

第一遣外艦隊(中支ノ政情ト学生運動他)

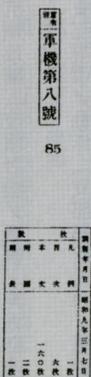
馬公要港部(満洲事変発生後ニ於ケル警備

状況他)

付図 二枚

付表 一枚

昭和六年事變海軍戦史 戦紀巻一



軍令部

満州事変・上海事変の全貌が初めて明らかに

本書が編纂された意義は、大海令(奉勅伝宣)という天皇の命により、事変に参加した海軍中央部及び上海現地部隊(第一遣外艦隊及び麾下の上海陸戦隊)等の関係部門(以下「関係部署」)のすべてが、事変全期を通じてそれぞれの事績を明らかにすることによって、天皇に対する復命書の役割を担ったことである。同時にそれは、海軍自身にとって、それぞれの関係部署が事変後の反省結果を政策に反映すべき規範としての意味を持っていた。したがって記述は広範囲な生きた教訓であった。それは今日からみれば、とりもなおさず、幅広い研究に役立つ高い資料的価値を有している。それは大きく捉えて次の三つの意義を有している。

一つは、本書の記述内容は当時「軍機」という秘匿度が最も高いものであったため、史実の詳細が厚いベールに包まれていたが、本書の出版によって、それを語る素材が大量に読者に提供されたことである。既に敗戦直後に焼失し、今は現物を見ることすら出来ない海軍次官、次長、軍務局長、関係艦隊司令長官など事変関係者による発刊文書の内容が本書に数多く収録され、これが記述の中心軸に据えられている。さらに事件現場の責任ある人物からの包み隠しのない史料が反映されている。したがって、本書はこれまでの研究では不明確であったいくつかの疑問点の解明に大きく寄与するものと考えられる。因みに、事変勃発にいたる現地の空気や、戦端が開かれて行く因果関係を現地の海軍の動きから掌握することが出来る。また、天皇から事態早期収拾の意思を体した白川義則上海派遣軍司令官の心情や指揮行為、七丁口上陸の決

第二卷「戦紀卷二」

第一篇 上海事変発生前ノ一般状況及両軍ノ

衝突

起因(総説ノ遠因ノ近因並ニ二事件ノ推移)

上海租界協同防衛(協同防備計画ノ経緯ノ

戒厳令ノ布告)

中央海軍当局ノ措置(方針ノ上海事件前ニ

於ケル兵力ノ増派ノ上海事件ニ対スル指

導)

第一遣外艦隊ノ執リタル措置(方針並ニ事

件ノ処理ノ滿洲事変勃発当時ノ情况他)

第二篇 事変初期ニ於ケル海軍ノ作戦並ニ兵

力集中

事変初期ニ於ケル中央ノ作戦指導ト第三艦

隊ノ編成

事変勃発後ニ於ケル海軍兵力ノ増勢

連合艦隊ノ佐世保方面集中待機

第一遣外艦隊ノ作戦(日支両軍ノ衝突ノ停

戦ヨリ進撃決意ニ至ル迄他)

閩北戦(上海陸戦隊ノ支那側戦紀ニ現レタ

ル閩北支那軍ノ状況他)

吳淞付近水路ノ確保ト同要塞ノ攻撃(初期

ニ於ケル方針ノ作戦実施他)

第三篇 陸軍ノ出兵

陸軍出兵ノ経緯

第二艦隊ノ混成旅団輸送ト吳淞上陸作戦

第九師団ノ護衛及上陸

第四篇 海陸軍ノ協同作戦

協同作戦ニ至ル迄ノ第三艦隊ノ作戦

第九師団トノ協同作戦

陸軍ノ増兵

上海派遣軍司令部第十一師団ノ進発ト七了

口上陸作戦

三月一日ノ総攻撃及二日三日ノ追撃戦

閩北対岐戦及追撃戦

吳淞要塞ノ占領

蘇州攻撃(支那空軍ニ関シ出征時迄ニ知り

得タル情報他)

杭州攻撃(攻撃計画ノ概要ノ実施経過ノ概

要他)

支那空軍ノ動作(支那航空兵力ノ概説他)

第七篇 支那各地ニ於ケル我方海軍ノ行動

揚子江方面(南京砲撃事件他)

北支方面

南支方面

第八篇 事変中、支那海軍ノ動静

支那海軍ノ編制

事変ニ対スル支那海軍ノ態度

第九篇 在上海外国官民ノ状況

在上海外国軍隊(上海義勇隊他)

在上海外国官民ノ態度

在上海一般人ノ時局観

水先人問題

第十篇 情報

情報機関(上海事変前ノ情報機関ノ上海事

変中ノ情報機関及其ノ活動)

事変関係諸情報(一般情勢ニ関スル事項ノ

上海付近兵要地誌他)

第十一篇 宣伝

我方海軍ノ対外宣伝(対外宣伝ノ概況ノ対

外宣伝機関ノ宣伝機関活動ノ状況ノ宣伝

ノ効果)

我方海軍ノ対内宣伝(対内宣伝機関及其ノ

活動ノ対内宣伝ノ影響)

支那ノ対外宣伝(宣伝概況ノ支那側宣伝ノ

優越ナル諸点ノ各国ニ於ケル支那側宣伝

ノ概況)

付録 事変関係者所見摘録

付図 三七枚

付表 四枚

定経緯、さらに数多くの海軍中央部と現地間の報告・命令、陸・海軍間の交渉、日中双方の情報活動等は新しい発見といえよう。また、日中両軍の兵力、上海警備・事変指導方針、現地外務官憲と海軍部隊の係わり、陸海軍協同作戦、戦闘の展開等の詳細な事変展開と難航した停戦協定の締結経緯、英国公使館の動静等が時系列的にリアルに図版等を用いて鮮明に記述されている。

二つは、本書は上海事変が国を挙げて国際関係を重視し、事変収拾に成功を収めた希有かつ太平洋戦争に至るまでの間の最後の事例であることを示す歴史書である。同事変は一部の関東軍参謀の暗躍による満州の建国の目隠しであった。日本側は建国を成功させるために、国際関係の維持に神経を尖らせ、国際法を遵守し国家総力を挙げて収拾に努めた。本書とは別編纂として、国際関係文書が数多く収録されているのもこのためであった。国際都市上海の事変が如何に政治的色彩の強いものであったかを物語ると同時に、以後の日本が国際関係を無視し、強硬に国益を推進しようとしたことと著しい対照をなしている。

三つは、本書の編纂時はすでに統帥権干犯問題は終焉してはいたものの、海軍の統制は海軍省を中心に未だ保たれており、むしろ、艦隊派も条約派ともに虚心胆懐に事変処理に専念していたことを体系的に記録したものである。しかし、事変後、海軍省主導で行われた事変指導を巡って、海軍自身が大きな影響を受け、昭和八・九年に至って、軍令部の権限が強化される一方、省部ともに強硬派が占めるところとなり、ついに、海軍軍縮条約からの離脱という危機的な時代に突入した。本書は、海軍内部の変動直前の姿を著した貴重な歴史書であって、その後の海軍研究を行なう上で、極めて大きな価値を有しているのである。

大井及出雲付近ニ於ケル機雷爆発
第五篇 支那軍ノ動作
広東軍ノ特色
第十九路軍ノ行動
第五軍ノ戦闘参加並ニ編制・素質
支那軍ノ配備
総退却ノ状況

第六篇 航空部隊ノ戦闘
第一航空戦隊ノ進出
陸上基地ノ設営

第三卷「戦紀卷三」

第一篇 停戦交渉

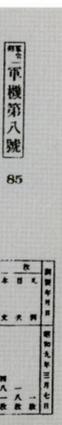
日支交戦中ノ停戦運動
停戦予備交渉（上海事変ニ対スル国際連盟ノ行動概説ノ予備交渉ニ於ケル停戦基礎案ノ三月十九日ノ協定案他）

停戦会議（停戦会議開始、委員及随員ノ會議推移ノ概況ト我方態度ノ會議案並ニ重要討議事項）
停戦問題ノ紛糾及協定成立（国際連盟ニ対スル支那側ノ策動ノ交渉成立ニ至ル非公式協議ノ停戦會議再開、協定成立他）

上海新公園ニ於ケル爆弾事件
第二篇 海軍派遣部隊ノ帰還
三月三日戦闘行動中止声明後ニ於ケル海軍ノ状況

増派部隊ノ内地帰還
第三篇 陸軍ノ撤兵
陸軍ノ撤兵ニ関スル経緯
上海派遣軍ノ撤収並ニ撤兵

第四篇 第三艦隊旗艦出雲ノ一時内地帰還



軍令部

海軍機第八號 85

昭和六七年事変海軍戦史 戦紀卷三

軍令部

第五篇 満洲国ノ建国ト我方海軍

満洲国ノ建国（奉天・吉林ノ独立ノ関東軍ノ齊々哈爾入城ト黒龍江省ノ独立他）
松花江ニ於ケル海軍派遣隊
營口事件

第六篇 熱河作戦ニ対スル海軍ノ協同
海陸協同作戦ニ至ル経緯及関東軍ノ行動
第二遣外艦隊ノ処置並ニ行動
関東軍ノ関内進出及停戦協定

第七篇 皇室ノ優典
第八篇 出征部隊指揮官ノ軍状上奏文
出征部隊主要職員表
昭和七年度連合艦隊編制
事変経過一覽表

付図 九枚

昭和六七年事變海軍戰史

戰紀卷一 事變前期

緒言

滿洲及上海ニ勃發セル今次事變ハ我が帝國ノ興廢ニ關セルモノナルト同時ニ全世界ノ國際政局ニ至大ノ影響ヲ及ボシタル重大事件ナリキ。蓋シ本事變ハ滿洲ニ於ケル鐵道爆破上海ニ於ケル邦人傷害事件ニ夫々端ヲ發セリト雖其ノ因ツテ來ル所極メテ深ク決シテ一朝一夕ニ突發セルモノニアラズ。遠ク日清戰役以來滿洲ヲ繞ル歴史的關係支那政變對日政策及其ノ民族思想ヲ背景トセル支那積年ノ暴戾ニ其ノ根本的因由ヲ有スルモノナリ。

日清戰役後締結シテ遼東半島讓與ニ決スルヤ清ノ策謀ト露國東進ノ野望トハ相俟ツラ遂ニ露佛獨ノ三國干渉トナリ我ハ遼東還付ノ已ムナキニ至リシガ間モナク清ニ恩ヲ賣リタル露ハ滿洲ニ其ノ爪牙ヲ延バシ獨佛英亦支那本土ニ利權ヲ求

昭和六七年事變海軍戰史

戰紀 卷二 事變中期

第一篇 上海事變發生前ノ一般狀況及兩軍ノ衝突

第一章 起因

第一節 總說

支那ニ於ケル各種排日運動ハ明治四十一年ノ辰九事件ヲ發端トシテ屢反復セラレ殊ニ國民政府樹立後ニ至リテハ所謂革命外交ヲ標榜シ國權恢復ニ對スレ莫ク努力ト道程トヲ履マズシテ徒ラニ不平等條約ノ撤廢ヲ叫ビ排外運動ノ實踐ヲ指導セル爲之ニヨリ一層ノ發達ヲ見送次組織アリ統制アル全國的民族運動ト化シ發ニハ抗日ノ態度ニ變ジ來レリ。斯クテ中央黨部ノ排日態度ト民族の排日運動トハ相俟ツテ一方條約廢棄我ガ權益侵害ノ行動ヲ敢テシ他方經濟的ニハ在支邦人ノ迫害

第四卷 [附録] 國際關係・國際關係參考文書

〔國際關係〕

第一章 事變ト國際連盟

國際連盟

國際連盟ニ於ケル滿洲事變審議

國際連盟支那調查員

國際連盟ニ於ケル上海事變審議

「リットン」報告書審議

日本ノ國際連盟脱退

第二章 事變ト對米・英・佛交涉

滿洲事變勃發直後

錦州攻略前後

上海事變中ノ情況

第三章 事變ト對蘇國交涉

第四章 滿洲國ノ獨立

建國及日本ノ承認

列國ノ滿洲國ニ對スル態度

第五章 滿洲建國ト支那側ノ態度

南京政府ノ對滿洲國態度

反滿策動

〔國際關係參考文書〕

一 國際連盟支那調查委員會中間報告

二 國際連盟調查委員會報告書

三 「リットン」報告ニ對スル帝國政府ノ意見書

四 帝國意見書並ニ理事會ニ於ケル日本代表ノ聲明ニ對スル支那側ノ意見書

五 國際連盟上海事件調查委員會報告書

六 上海事件ニ對スル上海工部局調査書

七 國際連盟總會報告書

八 日本政府陳述書

九 國際連盟規約

一〇 戰爭拋棄ニ関スル條約（不戰條約）

一一 九國條約

昭和六七年事變海軍戰史 附録 國際關係

軍令部

昭和九年二月十四日

昭和六七年事變海軍戰史 附録 國際關係 參考文書

軍令部

昭和九年二月二十日

昭和六七年事變海軍戰史

戰紀卷三 事變後期

第一篇 停戰交涉

第一章 日支交戰中ノ停戰運動

第一節 事變勃發直後ノ停戰運動

一月二十九日
日ノ停戰

昭和七年一月二十九日午前零時上海事變勃發スルヤ其ノ日直ニ英米兩總領事ニヨリテ停戰運動開始セラレタリ

我が艦隊第一遣外艦隊司令官ハ我方軍ハ専ラ居留民保護ヲ目的トスルモノニシテ支那軍ト交戦ヲ欲スルモノニ非ザルノ見地ニ基キ取敢ズ停戰ニ同意シ兩軍共現位置ヲ保持シ二十九日午後八時ヨリ戦闘行爲ヲ中止スルノ約成立セリ

英米兩總領事ハ更ニ歩ヲ進メ先ヅ支那側ト會議シ次デ我方方ノ意向ヲ求メ三十一

第一章 日支交戰中ノ停戰運動

昭和六七年事變海軍戰史

附録 國際關係

第一章 事變ト國際聯盟

第一節 國際聯盟

第一目 國際聯盟ノ組織

國際聯盟ノ創立

世界大戰ニ於ケル戰禍ノ甚大ナル史ニ上メ未曾テ見ザル所ニシテ其ノ屈ヲ結ブヤ敗者ハ素ヨリ勝者ト雖共ニ等シク疲弊困憊ノ極ニ達シ或ハ正義人道ノ叫ビトナリ或ハ平和愛好ノ聲トナリ戰爭ヲ再ビセザラントスルノ熱望ハ全世界ニ瀰漫スルニ至レリ

斯クテ各國家機關相互ノ協調ニヨリ戰爭ノ發生ヲ防止シ世界ノ平和ヲ確立増進セントスルノ運動トナリ茲ニ國際聯盟ノ實現ヲ見ルニ至レリ

即チ大正九年(一九二〇年)六月二十八日巴里ヴェルサイユ平和條約ニ署名セル日英米佛伊以下三十二箇國ハ聯盟規約ヲ締結シ後聯盟ノ招請ニ依リ加盟セル十三箇國及聯盟規約

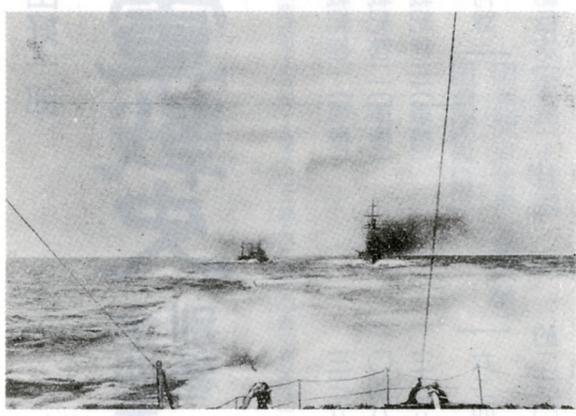
第一節 國際聯盟

〔総目次〕

- 一 戰紀卷一(軍機)
- 二 戰紀卷二(軍機)
- 三 戰紀卷三(軍機)
- 四 付録 國際關係(秘)
- 五 付録 國際關係參考文書(秘)
- 六 通信史(軍機)
- 七 機関史卷一(極秘)
- 八 機関史卷二(極秘)
- 九 機関史別冊(極秘)
- 一〇 衛生史(秘)
- 一一 經理史(極秘)

〔解説〕

- 一 昭和六七年事變海軍戰史の由来について(田中宏巳)
- 二 昭和六七年事變海軍戰史の資料的意義について(影山好一郎)



上海へ急航中の第三戦隊



日支停戦会議

昭和六七年事變海軍戰史 總目次

軍令部

昭和六七年事變海軍戰史 總目次	昭和六七年事變海軍戰史 總目次
--------------------	--------------------

軍機

海軍軍令部編／監修・解説 田中宏巳・影山好一郎

昭和六七事變海軍戦史

全四巻
別巻一

田中宏巳（たなかひろみ）

一九四三年 長野県松本市生まれ

一九七四年 早稲田大学大学院博士課程

満期退学。現在、防衛大学校教授

（主要著作）

『東郷平八郎』(ちくま新書 筑摩書房) 他

影山好一郎（かげやまこういちろう）

一九四一年 大阪府大阪市生まれ

一九七一年 防衛大学校及び研究科卒業

現在、防衛大学校教授

（主要著作）

『近代日本戦争史』(共著 同台経済懇話会編) 他

刊行概要（復刻版・A5判・上製クロス装・総二六〇〇頁・折込含む）

第一巻 戦紀巻一（軍機）

三三六頁

第二巻 戦紀巻二（軍機）

一〇四八頁

第三巻 戦紀巻三（軍機）

三三六頁

第四巻 付録
国際関係（秘）

六二四頁

別巻 総目次（軍機）＋解説

約三三〇頁

揃定価 本体九六、〇〇〇円＋税（分売不可）

ISBN4-89774-260-1 C3031

二〇〇一年七月下旬一括刊行

新刊水関連書

第二復員局残務処理部編

太平洋戦争開戦前史

開戦迄の政略戦略

田中宏巳監修 本書（原題『開戦迄の政略戦略』）は、米国議会図書館所蔵「日本の公文書及び検閲資料」に収録された復員局報告書の一部をなすもので、今回全文を初めて公刊する。日本軍部、主として海軍側から太平洋戦争開戦の原因を戦後、公式に総括した最初の歴史的文書である。

本体16,000円（A5判・上製クロス装）

◆オーストラリアに残る旧日本軍資料の全貌を明かす新資料

オーストラリア国立戦争記念館所蔵

旧陸海軍資料目録

田中宏巳編 本書は、連合軍がニューギニア戦線で捕獲・蒐集した資料と戦後のラバウル収容所の生活に関する資料の目録と解説を収録。太平洋戦争史、敗戦後の抑留・引き揚げ史研究のための貴重な手引書。

本体15,000円（B5判・上製クロス装）

本書は歴史・日本史・東洋史・政治・法律・国際関係等の研究者、研究機関、及び大学図書館にお薦め下さい。

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

●下記の書店にお申込み下さい